第 6 章　熟議が高校生と大学生に与える影響
～自己認識の変化とテーマ理解における事前事後～

1.　「熟議」の教育的意義

日本の教育がまた一つ新しいステージに向かって動き始めている。平成 26 年 12 月に中央教育審議会答申として「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」が出された。大学教育の一連の教育改革の流れを受けて、大学教育の質的転換、大学入試制度改革、中等教育と高等教育の接続から高校教育の改革へと進んできている。

高校教育の改革では、知識中心の教育を改め、「創造性やリーダーシップ、企画力などの多様な資質・能力」の育成を重視するとともに、「受け身の学修から、多様な生徒が主体的・協働的」に学ぶ「学習の転換」がめざされている。また、「学校内外の様々な学習歴や活動実績等」を評価するとされ、基礎学力だけでなく、同時に幅広い資質・能力の涵養が課題であることが指摘されている。これを受けた新しい学習指導要領作成に向けて、例示として「アクティブ・ラーニング」が注目されている。この学習は、一般に「能動的学習」を指し、文科省では「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習」としている。

「熟議」は協働をめざした対話であり、参加し討議するプロセスにおいて、「課題に立ち向かい、乗り越えるための知恵と実行力」が身につくことが期待されている。「熟議 2014 in 兵庫大学」では、事前に、二つのテーマに関わる情報や意見を相互に閲覧、共有し、2 回の「熟慮」の段階を経て、当日の話し合いに参加する方法が採られた。知識や情報を得るだけでなく、それを自分なりに理解し、活用して具体的なテーマや課題に取り組むこの手法は、とくに高校生や大学生に対して、まさに「アクティブ・ラーニング」となっている。

一方、これまでの高大連携は、教育課程の接続という観点から進められてきたが、今後は、高校から大学の 7 年間において、これからの時代に社会で生きていくために必要な「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度(主体性・多様性・協働性)」を養うことのできる多様な活動を意図的・計画的に含めていくことも重要であろう。この観点から、異年齢の高校生と大学生が一般の社会人や地域の大人たちと共に学び、市民性を理解し、社会への参画と協働についての態度・意欲を育む教育効果をもつプログラムとしても熟議を位置づけることができよう。

本章では、このような考え方に立ち、熟議の事前と事後におこなった自己認識シート、事前・事後アンケートと自由記述データ、大学生の事後ワークショップ（ふり返り）の記述を分析し、熟議を通して高校生と大学生にどのような変化や成長があったのかを明らかにする。ただし、あくまでも自己評価であることに留意し、数値だけでなく自由記述による生の声をすくい取りながら、学生の内部に起こったことを描いて行くことにする。

2.　大学生と高校生の「熟議」による自己認識の変化

(1)「熟議」を通してどのような能力に変化があったのか

1）兵庫大学学生の自己認識シートにおける能力評価　～「規律性」が最も伸びる～

熟議に参加する兵庫大学の学生に熟議の前と後で、能力に関する自己評価をしてもらっている。ここで学生とは、一般参加者である「社会人」と同様、ワークショップの議論に加わる学生（以後、適宜 WS 学生あるいは WS と略する）（18 名）と各テーブルでファシリテーター（以後、適宜 F 学生あるいは F と略する）（14 名）を行う学生である。熟議を経験した彼らは、自己についてどのような変化を経験しているだろうか。まず、事前と事後における自己評価の変化を概観する【表 6-2-1】【図 6-2-1】。

（以下、事前事後比較表内の二重線は数値の高い方から第一位、第二位、一重線は低い方から第一位、第二位。また、網掛けは変化率が高い項目、斜字は低い項目である。）

能力項目	実施前平均	実施後平均	増減
自主性	3.25	3.72	+0.47
思考力	2.81	3.22	+0.41
実行力	3.25	3.59	+0.34
対応力	3.13	3.44	+0.31
交渉力	2.69	3.09	+0.41
会話力	3.34	3.56	*+0.22*
計画力	2.88	3.28	+0.41
規律性	3.38	4.00	+0.63
運営力	2.84	3.41	+0.56
貢献性	2.97	3.50	+0.53

表 6-2-1　兵庫大学生の能力の変化

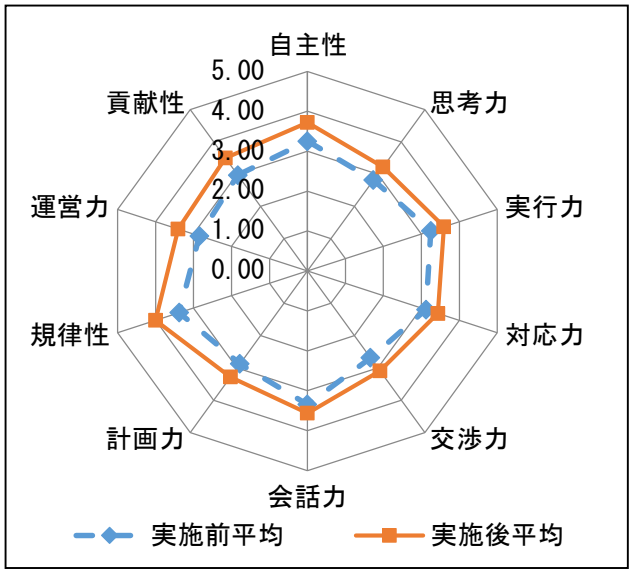

図 6-2-1　兵庫大学生の能力の変化

事前では、5 点満点（5 段階尺度）で最も高く評価されたのは「規律性」（「社会のルールや人との約束を守る力」）3.38 であり、第 2 位は「会話力」（「相手と意思疎通を図る力」）の 3.34 となっている。一方、最も低いのは「交渉力」（「人との関わりを踏まえ、働きかけて相互理解へ導く力」）2.69、「思考力」（「問題の要点を把握して、根拠をもとに論理的に考える力」）2.81 である。事後は「規律性」が 4.00 で最も高く、「自主性」（「物事に進んで取り組む力」）の 3.72 が次いでいる。変化率が最も大きいのは、「規律性」+0.63、「運営力」（「違う立場の人々の集まるチームを適切に運営する力」）+0.56 である。

大学生にとって、熟議は授業とは異なる学びの場となっている。熟議の準備段階から熟議の手法についての講義、ファシリテーション技術の研修等において、外部講師や熟議担当の教員による指導を受け、職員とも関わりながら、きちんとプログラムをこなす必要がある。数ヶ月にわたり、学び、熟慮し、熟議当日、それぞれの役割を果たし終えたことへの充実感が感じ取れる結果である。

比較参照のため、同様のシートで高校生の数値を見てみよう（p97【図 6-2-4】参照）。事前において、最も高い評価は、「規律性」3.47 であり、「自主性」（「物事に進んで取り組む力」）の 3.13 が次いでいる。一方、最も低いのは「実行力」（「目標に向かって行動する力」）2.81、次いで「貢献性」2.84 である。事後は「規律性」が 0.34 増加し 3.81 で最も高く、「思考力」3.66 が次いでいる。変化率が最も大きいのは、「思考力」+0.66 である（高校生についての分析は p102 参照）。

大学生、高校生ともに、事前では「規律性」が高いが、変化率では大学生で「規律性」+0.63 が最も高く、高校生では「思考力」+0.66 が最も高くなっている。大学生では熟議の手法に則って、大人である社会人と共に意見を組み立てながら議論できたことが影響を与えていると考えられる。高校生では事前課題を含めて、特定のテーマについて時間をかけて思考を重ねることが出来た充実感が反映されているのではないか。

つぎに、大学生についてワークショップに意見を出す側として参加した学生とファシリテーターとして参加した学生とに分けて見てみよう。

2）ワークショップ参加学生　～「計画力」が最も伸びる～

ワークショップに参加した学生 18 名（以下、「WS 学生」と表記）の自己認識シートを熟議の事前と事後で見ると、10 項目のうちもっとも伸び率が高いのは、「計画力」（「現状を把握し、解決に向けて筋道を立てる力」）であり、5 点満点（5 段階尺度）で事前の 2.95 から 3.61 へと+0.66 となっている。今回の熟議では、事前の課題が出され、ネット上の特設サイトで他者の意見を参考にする機会が設けられている。そのプロセスにおいて、「防災」「防犯」についての現状把握ができており、そのうえで熟議当日、手順を踏んで議論ができたことがこのような結果につながっていると考えられる。つづいて、「運営力」が+0.60、「貢献性」+0.55、「交渉力」+0.54 の伸びが目立っている**【表 6-2-2】【図 6-2-2】**。

一方、最も低い伸びとなっているのは、「実行力」+0.14、ついで「会話力」+0.19 となっている。これらの 2 項目は、事前の時点で比較的高い数値となっていることから、今回の熟議に参加を希望した学生がもともと身につけている能力であり、熟議の影響は低い値にとどまったと見られる。

能力項目	実施前平均	実施後平均	増減
自主性	3.37	3.67	+0.30
思考力	3.16	3.67	+0.51
実行力	3.47	3.61	*+0.14*
対応力	3.16	3.61	+0.45
交渉力	2.68	3.22	+0.54
会話力	3.37	3.56	*+0.19*
計画力	2.95	3.61	+0.66
規律性	3.58	4.11	+0.53
運営力	2.84	3.44	+0.60
貢献性	2.95	3.50	+0.55

表 6-2-2　WS 参加学生の能力の変化

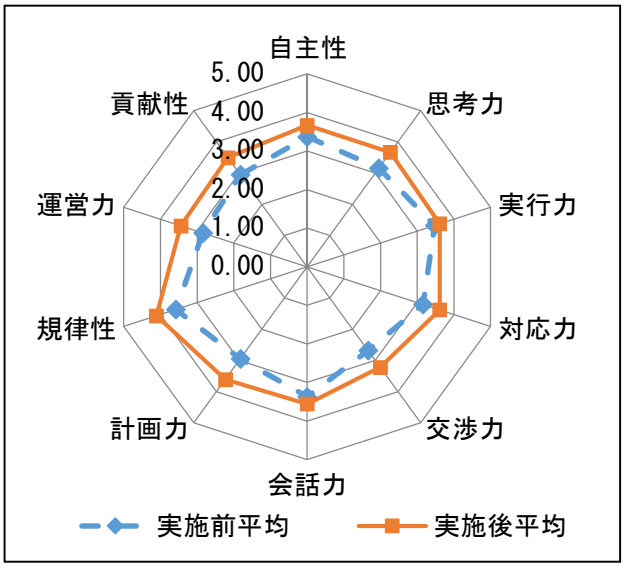

図 6-2-2　WS 参加学生の能力の変化

3）ファシリテーター　～「自主性」「規律性」が伸びる～

F 学生で最も伸びている力は、「規律性」と「自主性」の+0.64 であり、「貢献性」「実行力」+0.57 と続いている。その他の能力項目は全体として、ワークショップ参加学生や高校生と比較して、伸び率は低くなっている【表 6-2-3】【図 6-2-3】。WS 学生に比べ、F 学生はある意味では、「自主性」、「実行力」、「対応力」、「会話力」など自己認識シートにある 10 項目すべてを持ちあわせていなければならない。

能力項目	実施前平均	実施後平均	増減
自主性	3.14	3.79	+0.64
思考力	2.50	2.64	*+0.14*
実行力	3.00	3.57	+0.57
対応力	3.07	3.21	*+0.14*
交渉力	2.57	2.93	+0.36
会話力	3.43	3.57	*+0.14*
計画力	2.86	2.86	*+0.00*
規律性	3.21	3.86	+0.64
運営力	2.93	3.36	+0.43
貢献性	2.93	3.50	+0.57

表 6-2-3　ファシリテーターの能力の変化

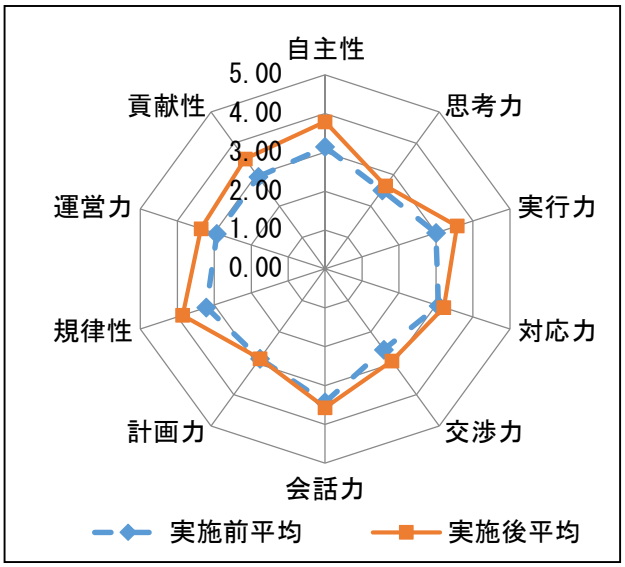

図 6-2-3　ファシリテーターの能力の変化

その観点から、担当したテーブルの進行がうまく行けば、多くの能力項目が伸びたと感じることになるであろうし、その逆にどこかでミスがあったり、全体として不成功の印象があったりすれば、すべて

の能力項目が低く評価される可能性がある。事前研修を通して、他者の意見に耳を傾けながら、テーブルをひとつの方向性に導く技術修得の難しさを実感しているだけに、もともとの目標設定が高く、満足度が低くなり、自己評価が低めに出たとも言えよう。

個別にみると、WS 学生で変化の小さい「自主性」と「実行力」が、F 学生では逆に伸びている点が注目される。また、「計画力」が+0.00 と変化がない。「計画力」が最も伸びている WS 学生と対照的である。F 学生はワークショップの進行役である。事前の研修では、「自分の意見を出すのではなく、参加者が積極的に意見を出せるよう、議論や雰囲気を盛り上げる」媒介者としての役に徹するよう指導を受けている。ファシリテートする技術は学ぶが、「現状を把握し、解決に向けて筋道を立てる力」については、評価が低くなるのは当然の結果とも言えよう。

4）高校生のワークショップ参加者　～「思考力」が最も伸びる～

高校生の参加者(当日参加者数 33 名)では、「思考力」（「問題の要点を把握して、根拠をもとに論理的に考える力」）の変化が+0.66 と最も高く、「対応力」（「状況を判断して関係や流れがうまくいくように行動する力」）+0.53、実行力（「目標に向かって行動する力」）+0.50 がつづいている【表 6-2-4】【図 6-2-4】。

高校生は、テーマへの関心を持ち、意見を発表する意欲自体が高い者が参加したとみられるが、熟議当日のテーブルでもしっかりと考えながら、議論の方向性を見定めながら発言したことがうかがえる。実際に、各グループの高校生が、「防災」「防犯」について他者の諸意見に耳を傾け、それらを受けて自分自身の考えをきちんとまとめて発言する姿が多く見られた。

WS 学生の「運営力」（「違う立場の人々の集まるチームを適切に運営する力」）が+0.60 であるのに対して、高校生では+0.06 にとどまっている点が際立っている。経験や情報をより多く持っている一般の社会人や大学生のなかでは、チーム全体すなわちテーブル全体の進み具合等にまで気を回すことが難しかったことも予想できる。

能力項目	実施前平均	実施後平均	増減
自主性	3.13	3.47	+0.34
思考力	3.00	3.66	+0.66
実行力	2.81	3.31	+0.50
対応力	3.03	3.56	+0.53
交渉力	2.94	3.22	*+0.28*
会話力	3.09	3.41	+0.31
計画力	2.94	3.34	+0.41
規律性	3.47	3.81	+0.34
運営力	3.06	3.13	*+0.06*
貢献性	2.84	3.28	+0.44

表 6-2-4　高校生の能力の変化

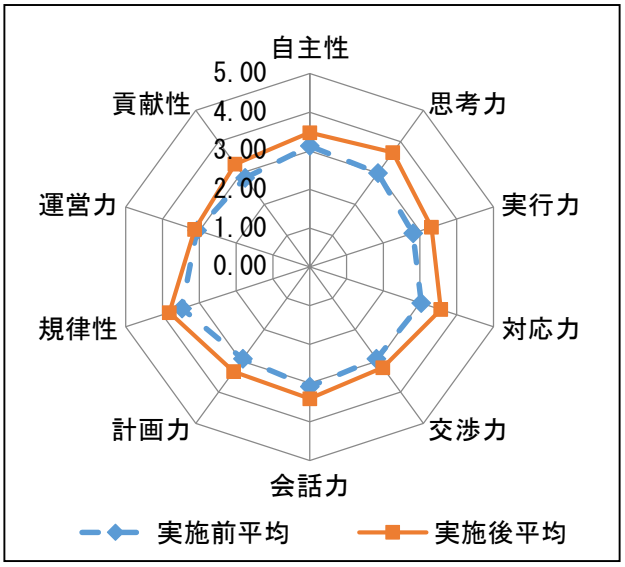

図 6-2-4　高校生の能力の変化

(2) 大学生は「熟議」という経験をどう捉えているか　～自由記述から～

熟議終了の当日、数ヶ月に及ぶ熟議の準備と当日の討議等をふりかえるためのグループワークが実施された。ここでは、その結果を通して、数値では読み取ることがむずかしい学生たちの思いや考え方の変化を捉える。

1)　意見の交換や進行等についてのふりかえり

グループワークでは、まず「①グループでは、意見を出し合い、話したいことを全て話すことができましたか」について話し合ってもらった。

【ワークショップ参加学生（WS 学生)】

全体としては、「全て話すことができたかといえば、そこまでには至っていない」とする意見が多く見受けられる。「うまくいったこと」と「うまくいかなかったこと」が混在している様子である。まず、うまく行かなかった理由として次のことがらが挙げられている。

〔うまくいかなかった点〕

- 社会人の方に頼りすぎた
- 大人の考え方に流された、大人の考えが高度すぎた
- 思っていることを言葉にするのは難しかった
- 緊張した、話す勇気がなかった、早くグループの人に慣れるとよかった
- 時間の都合で、グループとして最後の詰めができなかった
- （グループの）場が堅い面があった
- 意見は出すことができたが、グループ化する作業が難しかった

以上を見ると、一般参加者の社会人のなかで自分らしさを発揮できなかった様子や、思いや考えを言語化したり、抽象的なカテゴリーによりまとめることの難しさを感じたりしたことがうかがえる。一方、うまくいった理由は以下のとおりである。

〔うまくいった点〕

- 年配の方々の意見に学ぶことができた
- 周りの人の意見を聴くことができた
- 他人の意見を取り入れて話すことができた
- 緊張がほぐれてくると、たくさん意見が出た

大学の教室では経験できない、さまざまな立場の大人や高校生と場を共有して学ぶことができた経験を積極的に位置づけている様子がわかる。

【ファシリテーター（F 学生）】

全体としては、反省点が多く寄せられているが、総じて大きな失敗や混乱などはなく、なんとか最後まで進行役を務めたようである。上記と同様、「うまくいったこと」と「うまくいかなかったこと」に分けて、感想をまとめることにする。まず、うまくいかなかった点は以下のとおりである。

〔うまくいかなかった点〕

- 高校生は周りの大人に影響されやすいので、意見を引き出せなかった
- 意見が出てもそれに聞き入ってしまい、進行を促すことができなかった
- 終わりになって話が盛り上がるので、進行役として次に展開するタイミングがむずかしかった
- 話が長引いたときに終わらせ方がわからなかった
- 進行のための説明がうまくできなかった
- グループのメンバーに話を進めてくれる人が出てきたとき、自分の役目は何なのかと思った
- 何か議論するときには、いくら進行役であっても自分の考えは持つべきだと思った
- 話しやすい雰囲気作りが難しかった

コメントには、進行役として場の雰囲気づくりがまずは重要であるが、一般の社会人と高校生、大学生が混在するテーブルをまとめていくことの難しさを感じている様子が表れている。また、意見を出してもらう大変さ、その意見をまとめる力量の不足、発言を切り上げるむずかしさなどが述べられている。

F 学生は、意見を出さない「黒衣（くろこ）」に徹する役である。しかし、「何か議論するときには、いくら進行役であっても自分の考えは持つべきだと思った」という感想からも、出される意見を前もって想定し、どのような方向性でまとめていくのか、進め方についてある程度のイメージを持っていなければ、臨機応変に適切な言葉かけ、介入ができないことが分かる。つぎに、うまくいった点を見てみよう。

〔うまくいった点〕

- 自分の意見を出してしまうこともあったが、グループのまとめにつながったので、それはそれでよかったと思う
- 年齢層の幅が広かったので言葉づかいに気をつけて話すことができた
- テーマから逸れていないか気をつけて、逸れていればテーマを見直すようにした
- 臨機応変にできたところもあった

「ファシリテーターは意見を出さない」ということに気を取られすぎず、グループメンバーと積極的にやりとりを行い、意見をまとめるための方向性が見えてくるような言葉を添えることができている場合、進行がスムースに進んでいる様子が伺われる。今後、ファシリテーター養成の事前講座では、ファ

シリテーターとして「口を出さない」ことが、場の雰囲気作りのためのコミュニケーション量を減らすことにつながりかねない点について、留意していく必要があると思われる。

2）熟議に参加する意義について

ここでは、「熟議終了後の学生用アンケート」の結果から、今回の熟議のテーマを通して何を考えたのか、また熟議という手法に出会って何を感じたのか等についてみていく＜p149 アンケート参照＞。

〔熟議に参加して、自分にとって得られたものは何ですか〕

ワークショップ参加学生(WS 学生)もファシリテーター（F 学生）も、「普段、接することのない地域の方々と知り合い話し合うことができた」ことが最も高い数値となっている**【図 6-2-5】**。両群の差に注目すると、WS 学生の方が約 10 ポイント数値が高い。次いで、「ワークショップの手法を学ぶことができた」とする比率が高くなっている。両グループで差がみられるのは、「防災や防犯について知ることができた」についてであり、約 30 ポイント WS 学生の方が高い数値となっている。この結果から、F 学生は議論の内容より運営に気持ちやエネルギーを投入していたということが想像できる。

一方、「他学科の学生と知り合うことができた」については、昨年の F 学生が 83.3%、WS 学生 63.8%と大半が肯定していたのに対して、今年度は約 20～30%にとどまっている。これは、まず熟議準備の段階で受けた講義やワークショップやそれ以外でも交流を行う機会がほとんどなかったことが挙げられる。また、昨年度は学生のうち３・４年生が占める割合が 50.0%であったのに対して、今年度は 15.0%であり、学年間や学生全体をつなぐリーダーシップをもつ学生が少なかったことが影響しているのではないだろうか。今後も、学生同士のネットワークづくりや専門性の異なる学生同士の交流に役立つイベントとしての熟議の教育効果に注目して、事前プログラム自体の形態も工夫していく必要があるであろう。

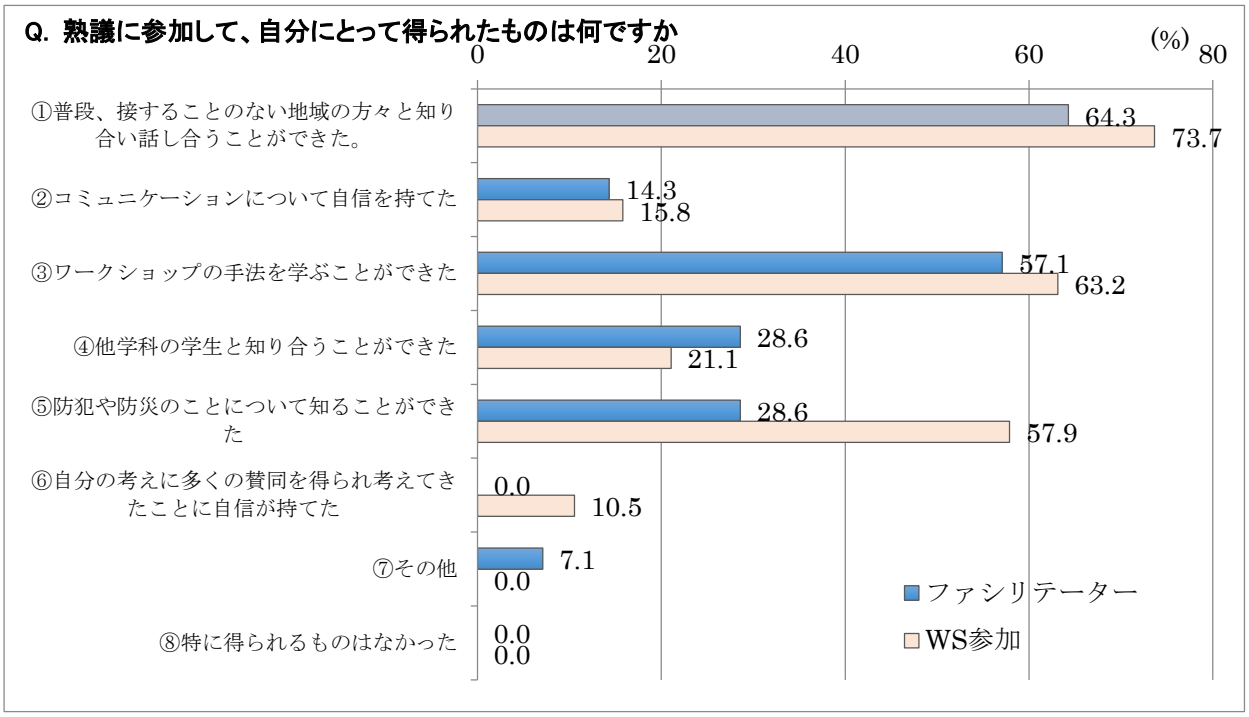

図 6-2-5　熟議に参加して得られたこと

〔ワークショップで出た結論について〕

「ワークショップで出た結論についてどう思うか」について尋ねたところ、WS 学生は 83%が「大いに賛同する」と答えているが、残りの 17%は「賛同はしないが納得はした」としている。一方、F 学生では 93%が「大いに賛同する」と答えており、「賛同はしないが納得はした」は 7 %にとどまっている【図 6-2-6】。

全体として、ワークショップで出た結論に納得していることは、その議論のプロセスが納得できるものであり、合意形成がうまく行ったことの証でもある。

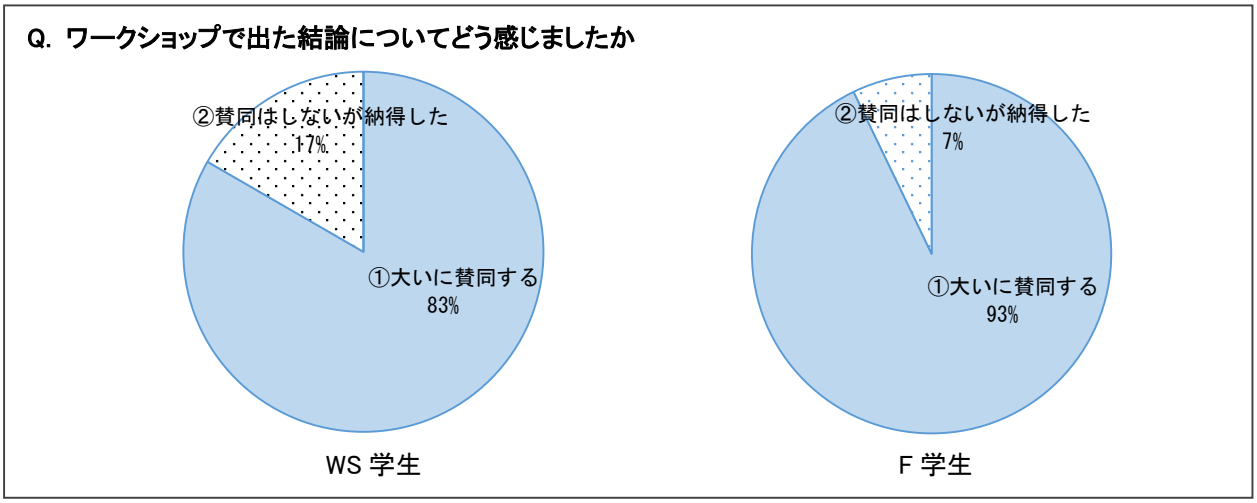

図 6-2-6　ワークショップで出た結論についてどう感じましたか

〔代表者討論会について〕

また、今年度はじめて行われた、グループの結論を持ち寄った「代表者討論会」について意見をたずねた。「ワークショップでの様々な意見が一つの結論に集約された」について、WS 学生は 44%であるのに対して、F 学生は 22%にとどまっている。F 学生でもっとも多い回答となったのは、「いろいろな意見が出てどれも良いということになった 」の 57%であり、WS 学生が 39%となっている【図 6-2-7】。

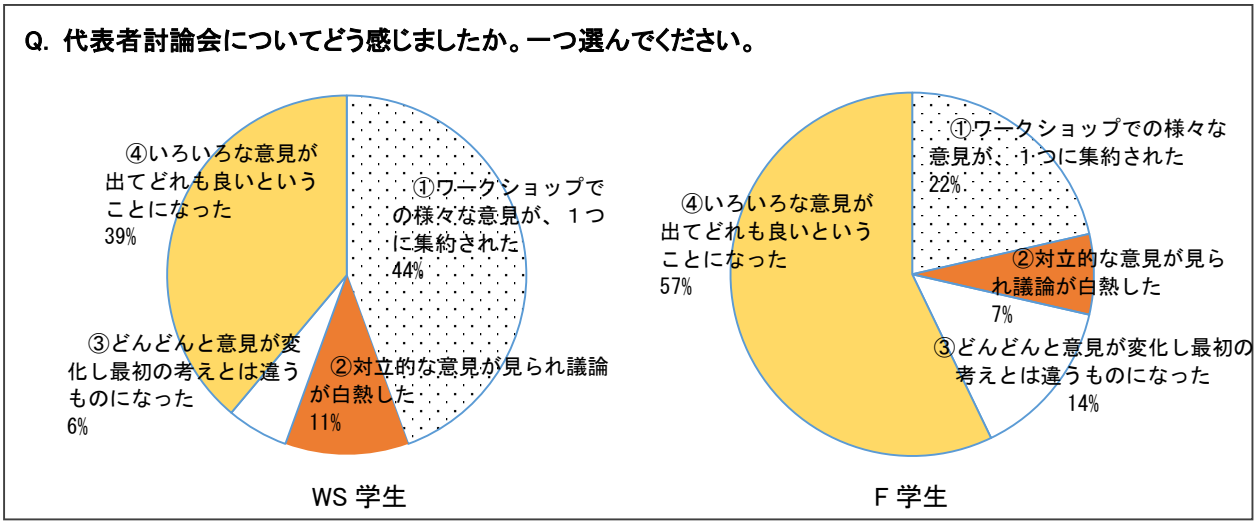

図 6-2-7　代表者討論会についてどう感じましたか

これらの結果から、熟議のなかで果たした役割によって、代表者討論会のとらえ方が異なっていることがわかる。WS 学生は意見が集約されたと感じているのに対して、F 学生はある程度分散した意見が出たが、特に鋭く対立するグループ意見はないと解釈している。この結果の背景要因を分析することはむずかしいが、WS 学生のほうが話し合いにより何らかの結論を見いだしたいという志向性を持つのに対して、F 学生は意見をまとめ切るというよりは、多様な意見を引き出す役割を担っていたことが影響しているかもしれない。

〔今後の熟議などのワークショップへの参加について〕

今後、熟議などのワークショップに参加する意向があるかどうかたずねた。「時間や都合が合えば参加をしたい」が WS 学生は 44%、F 学生は 57%となっている。「参加はしたいが学業が忙しくてできない」という回答が、WS 学生は 33%、F 学生 29%となっている【図 6-2-8】。全体では、約 80%が参加に前向きであり、熟議参加への充実感が感じられる結果となっている。今後、学生がこのようなワークショップや課外学習等に参加しやすくするため、授業に組み込む、単位化するなど多様な形態が検討されることが望ましい。

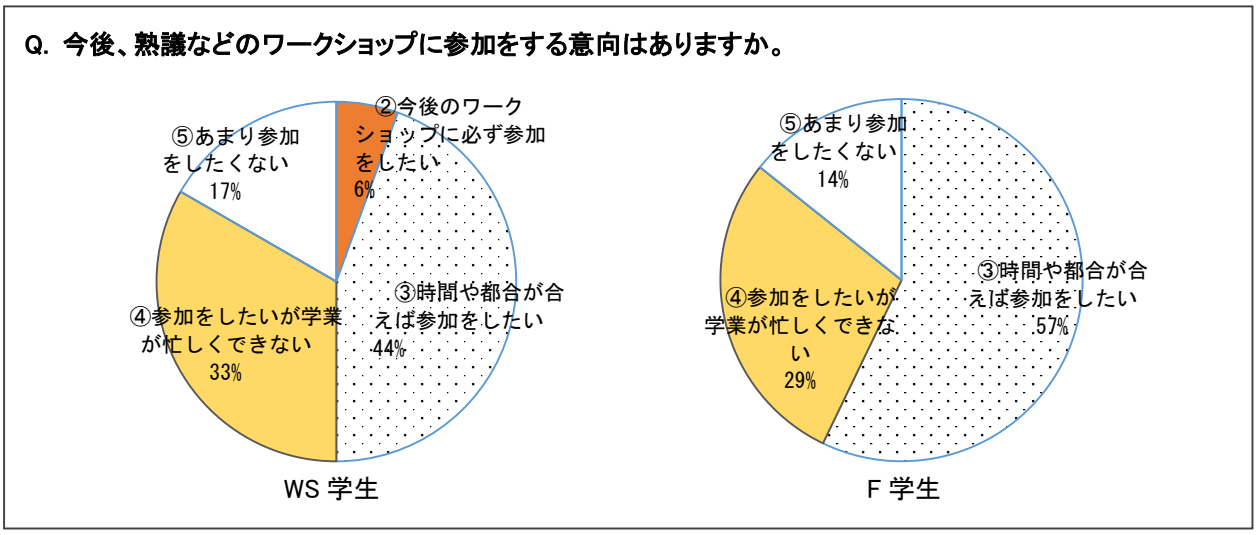

図 6-2-8　今後、熟議などのワークショップに参加をする意向はありますか

3.　高校生の分析

(1)「熟議」に参加した高校生の特徴

今回参加した高校生は、加古川地域 2 市 2 町にある公立高校に通う生徒を中心とした 35 名である（男子 18 名、女子 17 名：当日参加者は 33 名）。また、学科でみると、普通科 25 名、その他（専門学科、総合学科など）10 名となっている。「熟議」という言葉を知っていた生徒は 25.7%と、昨年参加した高校生の 3.6%に比べ高い数値となっている。一方、今回の熟議参加で知ったとする者は 71.4%を占めて

いる【図 6-3-1】。

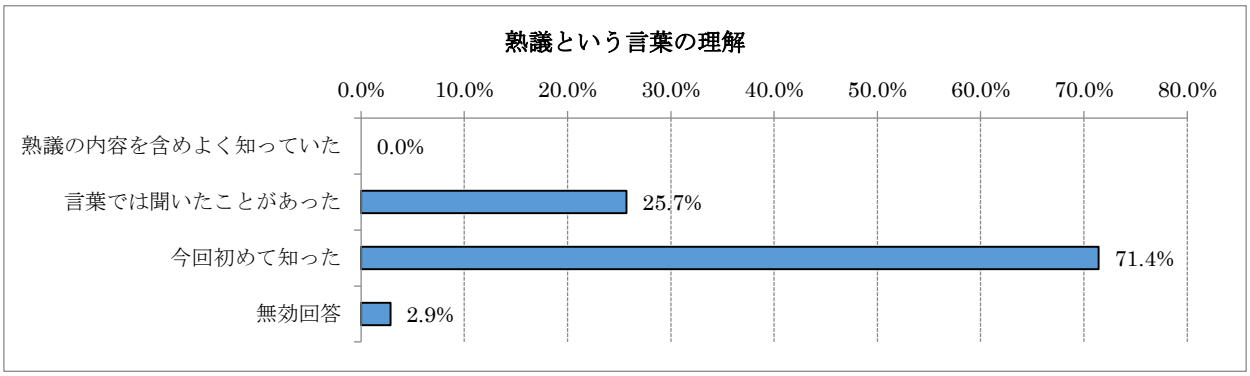

図 6-3-1　熟議という言葉の理解

「熟議 2014 in 兵庫大学」に参加した理由は、「学校の先生や、属する団体の関係者から参加を勧められたから」がほとんどである（82.9%）。「地域の安心・安全というテーマに関心があるから」は 20.0%であるが、テーマそのものに関心をもって参加した高校生も少なからずいたことが分かる【図 6-3-2】。

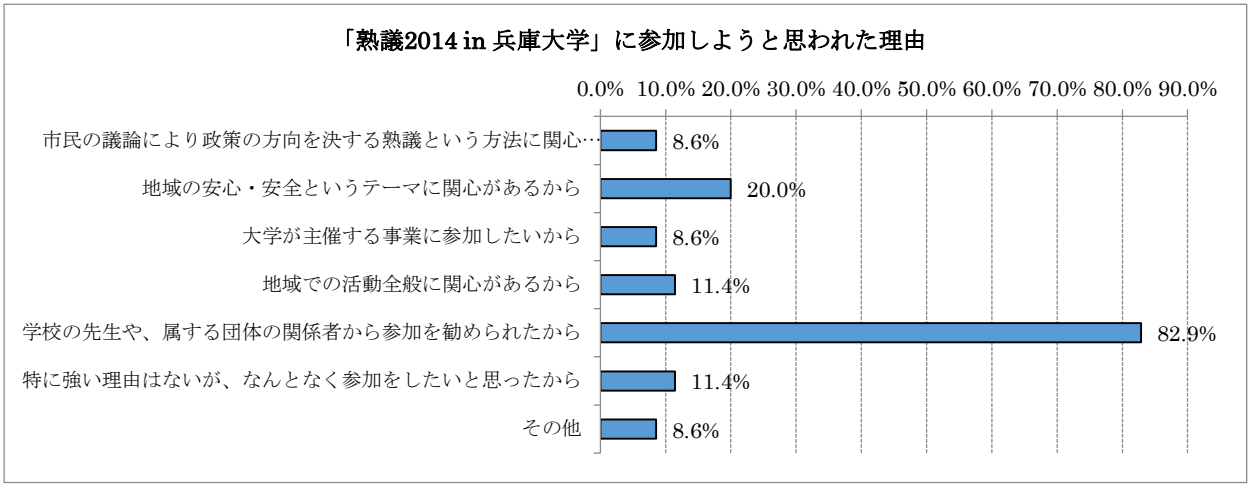

図 6-3-2　「熟議 2014 in 兵庫大学」に参加しようと思われた理由

それでは、熟議の本番であるワークショップの経験についてはどうであろうか。「ワークショップや市民会議、審議会、グループ討議の経験」がほとんどない者が 77.1%を占め、昨年度の 64.3%より 13 ポイントほど高い。「機会が少ないが、現在でも経験することがある」は 17.1%にとどまっている【図 6-3-3】。しかし、今年度の熟議では、事前の熟慮の段階で、自分自身で考えるだけでなく、ホームページの専用サイトで、他の参加者の意見を確認して考える機会が加わった。そのためか、熟議の進め方について「大体は理解することができた」とする高校生は 68.6%に上っている【図 6-3-4】。

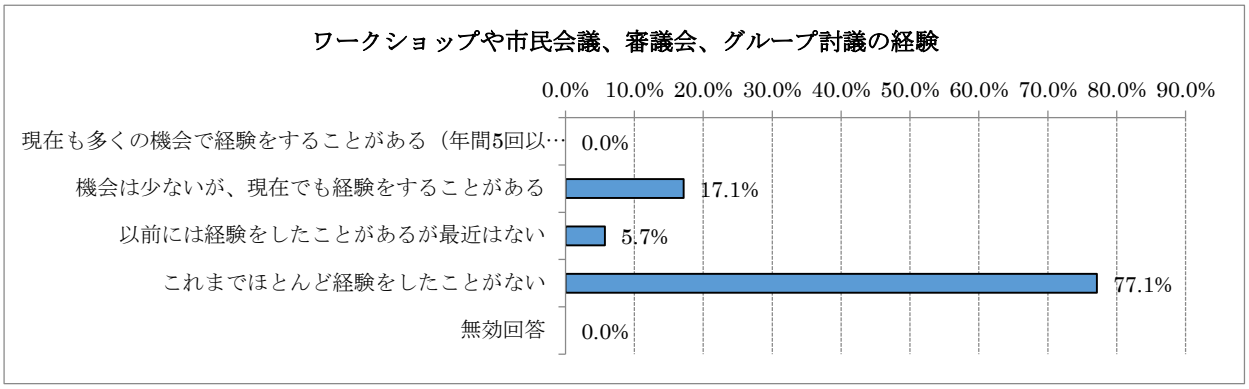

図 6-3-3　ワークショップや市民会議、審議会、グループ討議の経験

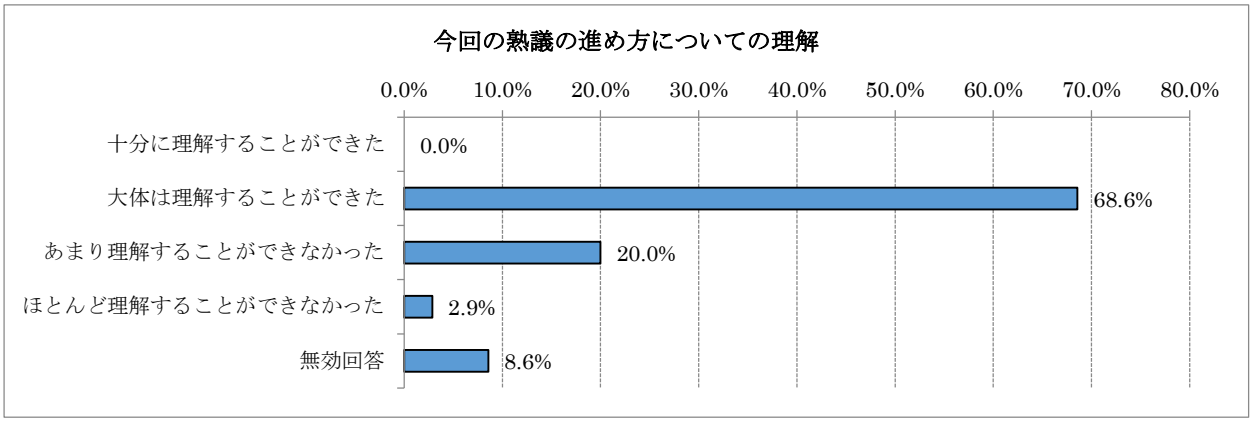

図 6-3-4　今回の熟議の進め方についての理解

また、熟議における「議論の段階（当日のテーブルでの討議）」への期待について、「他の人の意見を聞くことへの期待が大きい」とする割合が 37.1%であり、ついで「どのように議論が進むのか、進め方を知る期待が大きい」も 22.9%となっている。さまざまな立場の人々が、同じテーブルで意見を出し合いながら結論をまとめていくその手法自体への関心が比較的高いことがうかがわれる【図 6-3-5】。

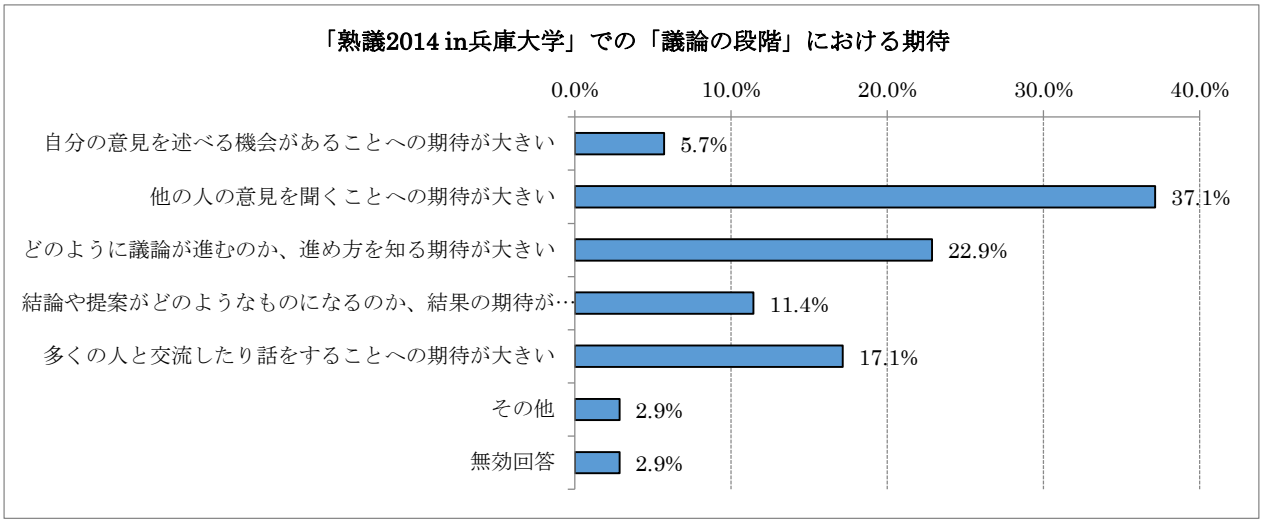

図 6-3-5　「熟議 2014 in 兵庫大学」での「議論の段階」における期待

一方、「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の良い点は、「多様な考えを知る機会がある（62.9%）」と捉えており、悪い点は「立場が上の人の意見に影響されやすい（34.3%）」、「時間や労力がかかりすぎて非効率(20.0%)」であると考えている【図 6-3-6】、【図 6-3-7】。

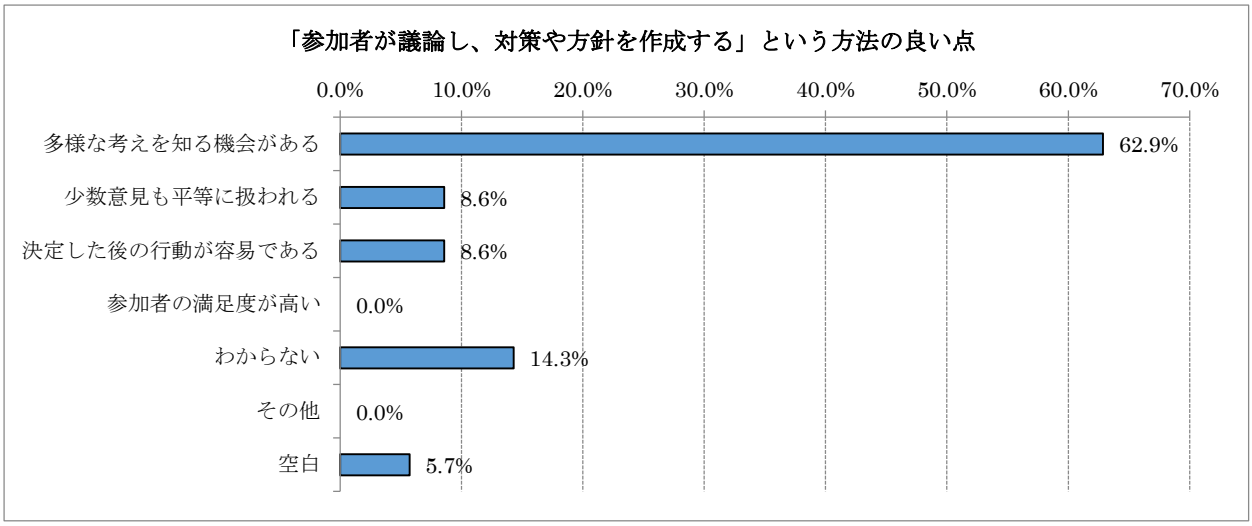

図 6-3-6　「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の良い点

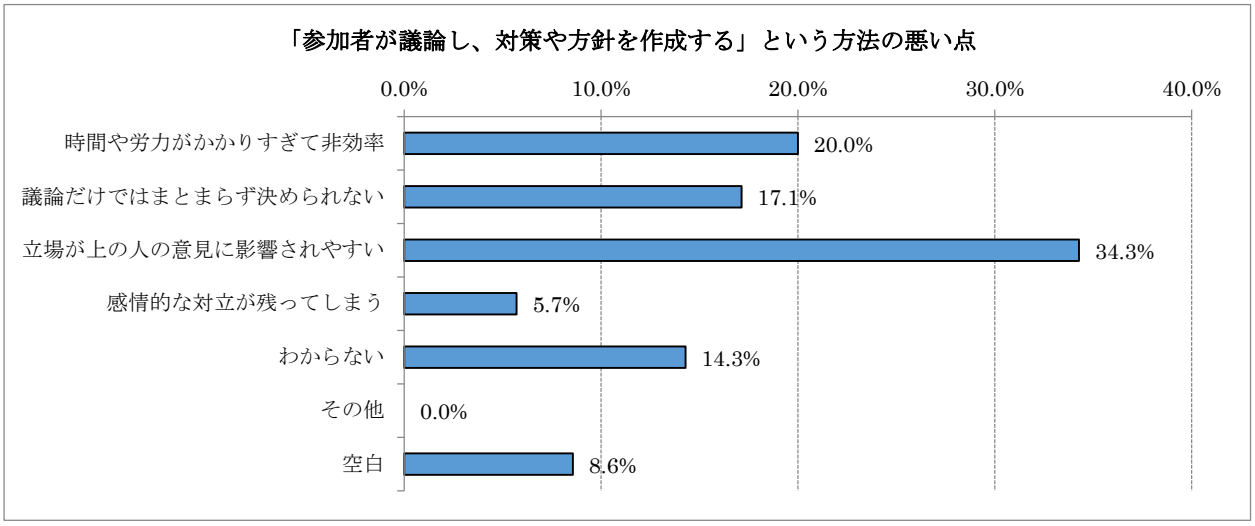

図 6-3-7　「参加者が議論し、対策や方針を作成する」という方法の悪い点

ここまでのデータを見ると、参加した高校生は「他の人に勧められて参加したが、熟議の進め方を理解して参加し、他の人の意見を聞き、多様な考えや意見をどのようにまとめていくのかに関心がある」ようだ。しかしながら、年上の学生や年配の人々の意見から受ける影響について心配している様子もうかがわれる。

熟議当日後にたずねると、大学生では、「自分の意見を述べる」が 5.6%から 44.4%に、「他の人の意見を聞く」が 27.8%から 44.4%に変化している。これに対して、高校生では、「自分の意見を述べる」が 6.1%から 18.2%に変化しているが大学生ほどの変化はみられない【図 6-3-8】。今後、高校生が年上の人々に遠慮せずに意見を言える事前研修や運営上の工夫が必要であろう。

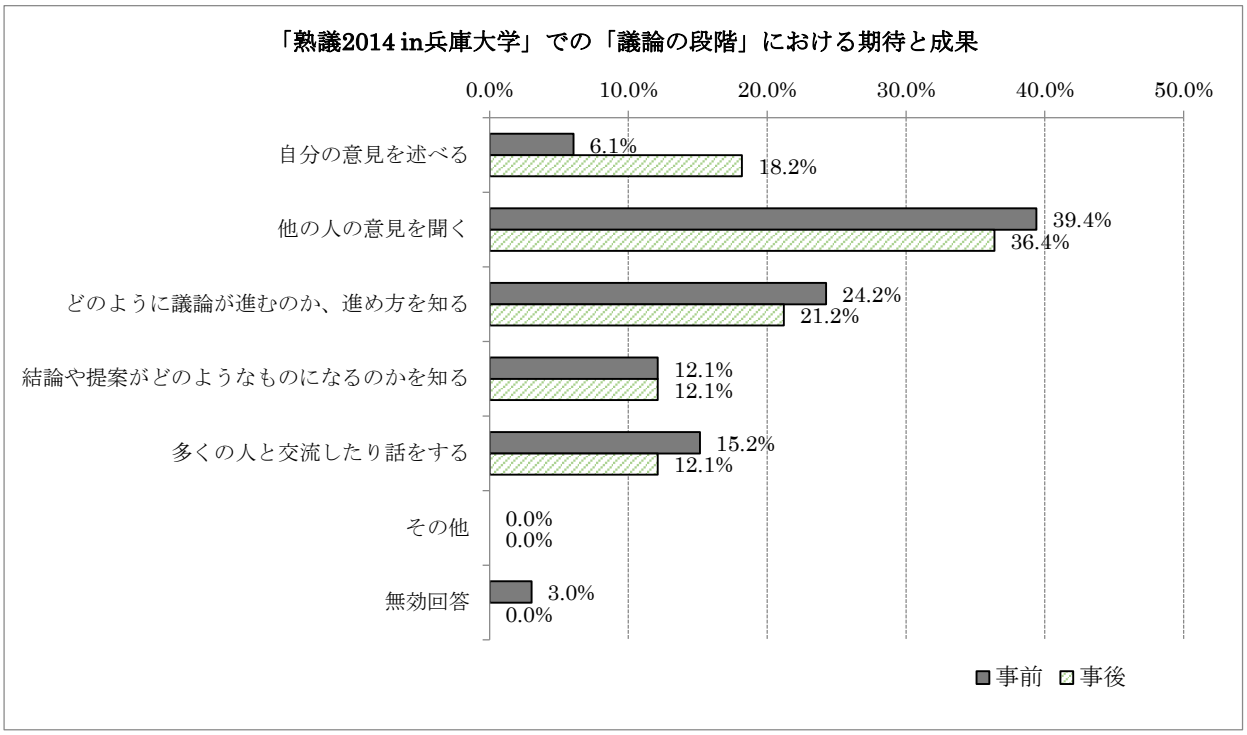

図 6-3-8　「熟議 2014 in 兵庫大学」での「議論の段階」における期待と成果

(2) 高校生は「地域」についてどう考えているか　～熟議前と熟議後～

実際の議論を行う前に、地域の課題につい、必要な情報をもとに考え、テーマ理解を深めるプロセスを踏んでもらうため、事前アンケートを実施した。また、同じ質問について、熟議当日を経て、考え方や見方が変化したかを知るため事後アンケートを行った。ここでは、熟議当日の議論を経験することにより、地域や地域の課題等に関する捉え方や考え方に変化があったのか見ていくことにする。

まず、「加古川地域（加古川市、高砂市、稲美町、播磨町）の安心、安全について」、課題と感じるものを挙げてもらった（複数回答）。

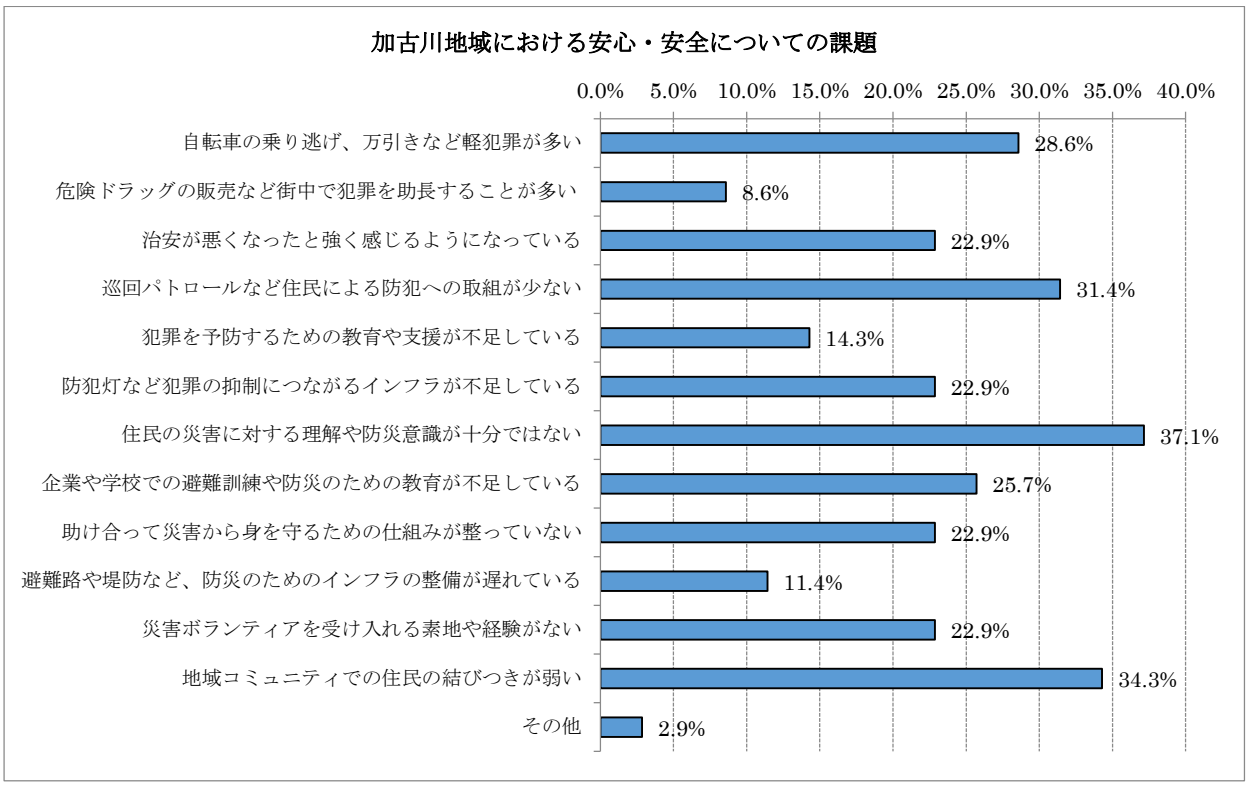

図 6-3-9　加古川地域における安心・安全についての課題（M.A）

もっとも高い数値となったのは、「住民の災害に対する理解や防災意識が十分ではない」の 37.1%である。ついで、「地域コミュニティでの住民の結びつきが弱い」34.3%である。大学生では、「防犯灯など犯罪の抑制につながるインフラが不足している」「地域コミュニティでの住民の結びつきが弱い」が最も多く同率で 36.8%となっている【図 6-3-9】。また、社会人(事前アンケート回答者 42 人)のみ取り出してデータを見ると、「住民の災害に対する理解や防災意識が十分ではない」61.9%、「助け合って災害から身を守るための仕組みが整っていない」54.8%、「地域コミュニティでの住民の結びつきが弱い」54.8%がつづいている。高校生、大学生の数値は社会人に比べて低いものの、世代を問わず、防災意識が不十分であり、地域での住民の結びつきが弱いという点についての見解は共通していることがわかる。

以下では、地域における「防災」と「防犯」2 つのテーマについての考え方が、熟議前と熟議後でどのように変化したのか見ていく。10 項目それぞれについて、賛成か反対かをたずねた結果を検討し、さいごにこれらの項目を全体として考察する。なお、選択肢の 5 段階尺度のうち、「大いに賛成」と「やや賛成」の合計を「肯定派」とし、「大いに反対」と「やや反対」の合計を「否定派」として分析に用いる。また、適宜、大学生や社会人の意見と比較参照するため、三者（高校生、大学生、社会人）の事前・事後を一覧できる表を用いて分析を行う。

① 「地域の安全を守るために、プライバシーが侵害されることがあっても仕方がない」

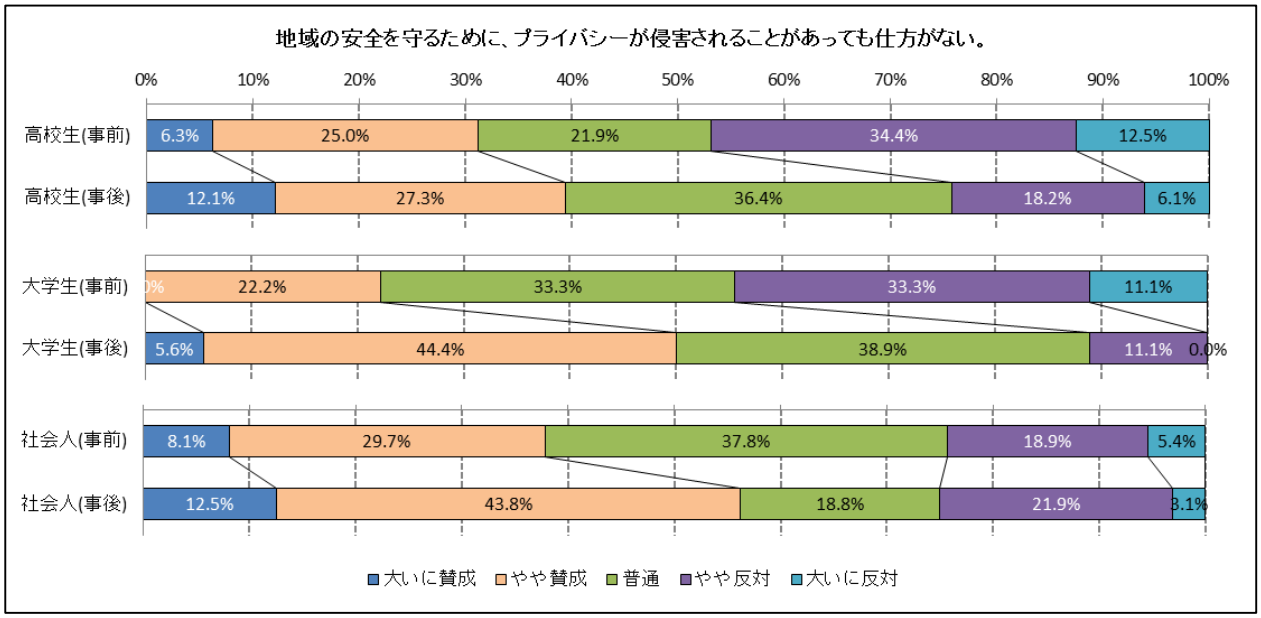

図 6-3-10　地域の安全を守るために、プライバシーが侵害されることがあっても仕方がない。

高校生では、「大いに賛成」「やや賛成」を合わせると事前では 31.3%であったが、事後には 39.4%に増加した。一方「普通」が 21.9%から 36.4%へと約 15 ポイント増加している【図 6-3-10】。この結果から、議論を通して、プライバシー重視の考えは場合により検討が必要であり、地域の安全の保障とのバランスの問題ではないかとの柔軟な態度へと幾らか変化したことがわかる。しかしながら、大学生では、「大いに賛成」「やや賛成」を合わせると事前では 22.2%から事後の 50.0%へと大幅に増加している(社会人では 37.8%から 56.3%への約 20 ポイント増加)。大学生の変化が大きい点が注目される。高校生では、「プライバシー侵害」というモラル規範に従う意識が影響していることが予想できる。

② 「防犯のため、住民同士が互いをよく知り、互いに見守るような地域コミュニティを作る」

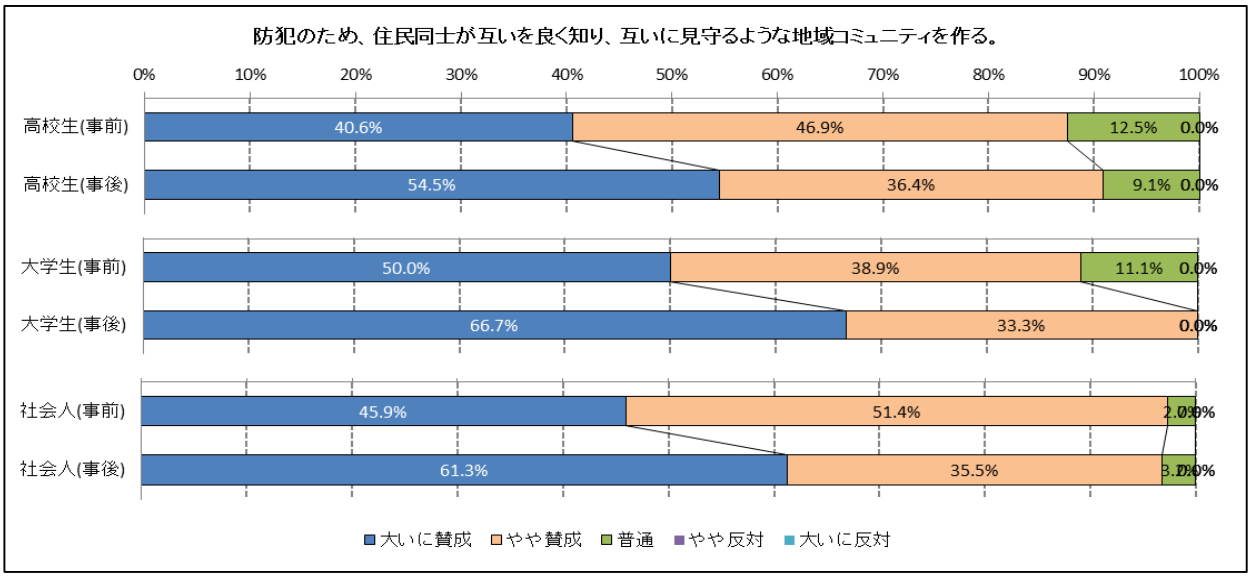

図 6-3-11　防犯のため、住民同士が互いを良く知り、互いに見守るような地域コミュニティを作る

高校生では「大いに賛成」が 40.6%から 54.5%へと増加している【図 6-3-11】。大学生も 50.0%から 66.7%へ、社会人でも 45.9%から 61.3%へと同様の変化がみられる。防犯の基本は、「お互いに見守る」ために、住民の合意を得ること、うまく働く仕組みを作り出すことにあるという点で三者は一致している。

③ 「防犯は主に警察、自治体の仕事であり、住民の果たす役割は限定されている」

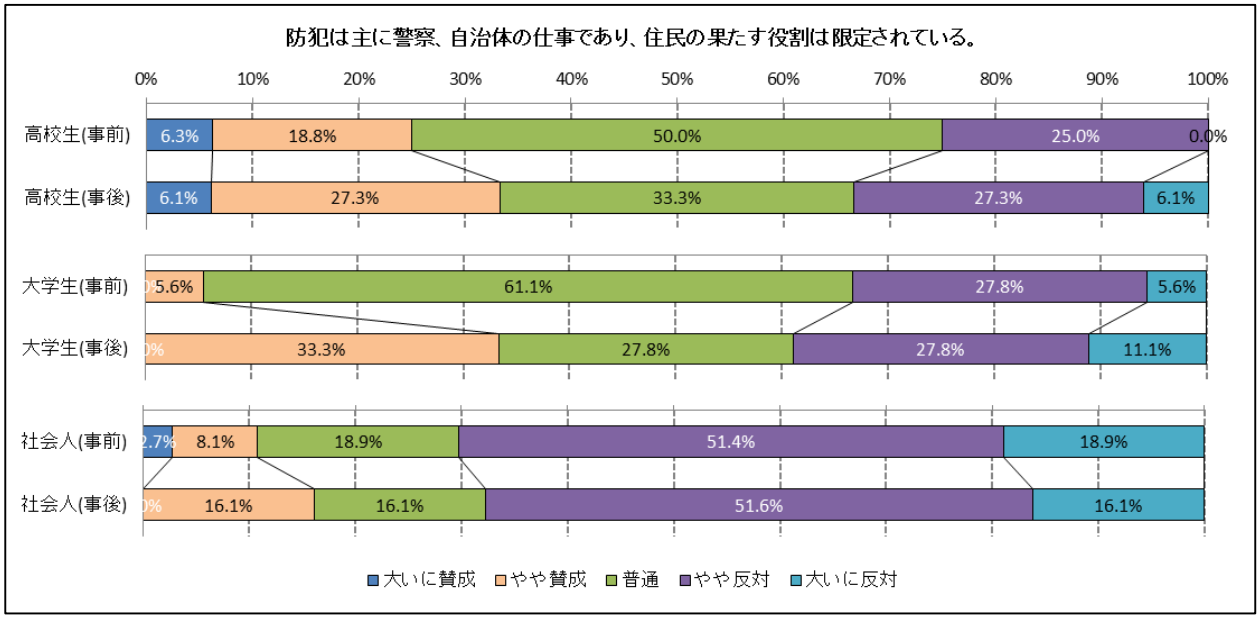

図 6-3-12　「防犯は主に警察、自治体の仕事であり、住民の果たす役割は限定されている」

高校生では「大いに賛成」は数パーセントにとどまっている。「やや賛成」との合計でみると、事前では 25.0%であるが、事後では 33.4%へと約 8 ポイント増加している。一方、「大いに反対」と「やや反対」の合計も約 8 ポイント増加している【図 6-3-12】。議論を経て、防犯をめぐる考え方が深まり意見が二極化する傾向が見られる。大学生では、肯定派は、5.6%から 33.3%へと約 28 ポイント増加する一方、否定派は 33.3%から 38.9%へと約 5 ポイント増加にとどまっており、住民の果たす役割の限界を感じている方向へと変化している。一方、社会人では否定派が 70.3%から 67.7%へと減少しているものの、依然として数値は高い。高校生と大学生の意見が、肯定、普通、否定に分かれたのに対して、社会人では、全体として住民の果たす役割の重要性について認識が高い。

④ 「貧困の撲滅や個人の悩みの解消を助けることで、犯罪の無い社会を創ることができる」

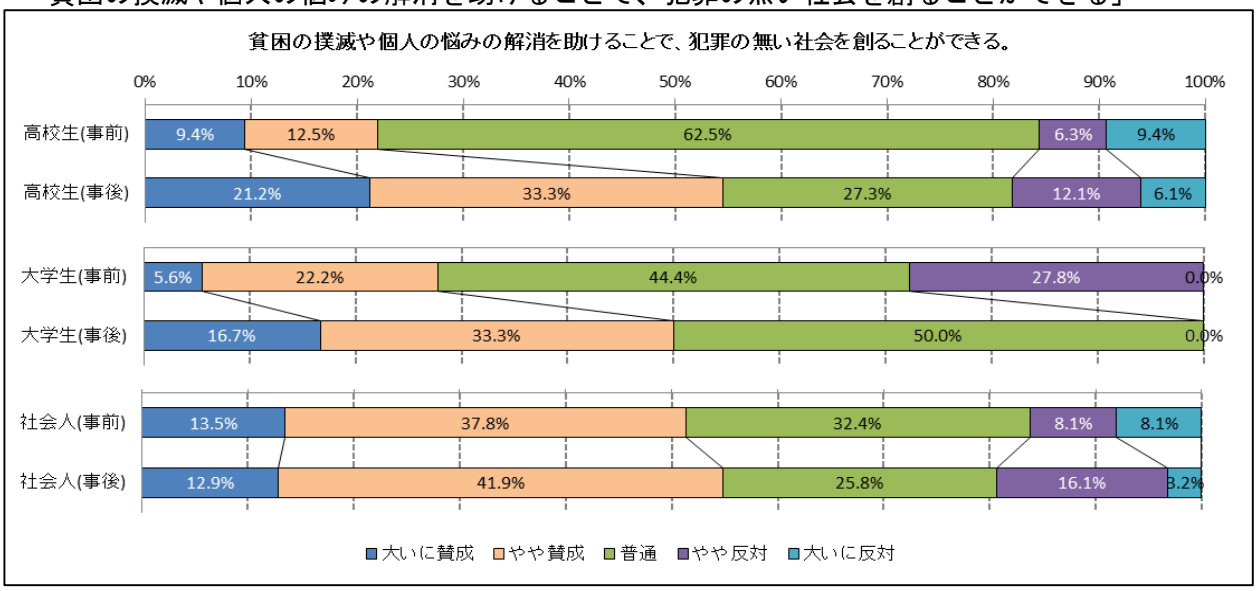

図 6-3-13　貧困の撲滅や個人の悩みの解消を助けることで、犯罪のない社会を創ることができる

高校生の「大いに賛成」「やや賛成」の合計でみると、事前では 21.9%、事後は 54.5%と 30 ポイント以上増加している【図 6-3-13】。大学生でも、27.8%から 50.0%へ約 22 ポイントの変化が見られる。防犯カメラ設置の是非の議論を通じて、犯罪のない社会を創るためには他の要因や方策へも目を向けるべきとの考えが出てきている様子が見られる。一方、社会人では 51.4%から 54.8%となっており、大きい変化は見られない。社会人は、犯罪が生まれる背景について、これまでの知識や経験を通じて、熟議前より複数の要因を想定していることがうかがわれる。

⑤「防犯のため、犯罪予備軍とされる者や仮釈放や執行猶予中の者の個人情報を積極的に地域に開示する」

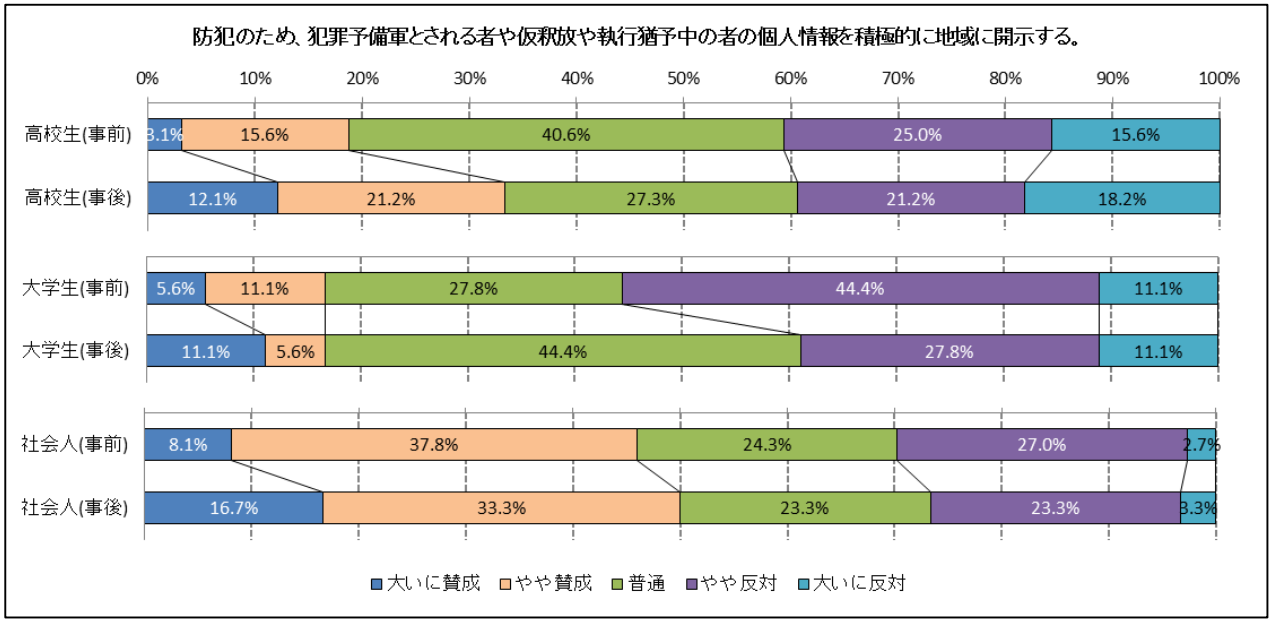

図 6-3-14　防犯のため、犯罪予備軍とされる者や仮釈放や執行猶予中の者の個人情報を積極的に地域に開示する

高校生で肯定派が 18.8%から 33.3%へと増加している一方で、否定派にはあまり変化がみられない【図 6-3-14】。大学生では、肯定派で変化はないが、否定派は約 17 ポイント減少している。社会人では、肯定派が 45.9%から 50.0%へとあまり変化がなく、否定派も 29.7%から 26.7%へとわずかな減少にとどまっている。全体として、高校生では情報開示へ賛成の方に傾いたが、大学生では「情報開示をするべき」との考えは減少した。昨今、人権と情報保護等の問題について関心が高まっているが、犯罪者についての情報開示となると判断が容易ではない。本結果には、このことが反映していると思われる。

⑥「安全なところで生活をしていないのは個人の選択と責任である」

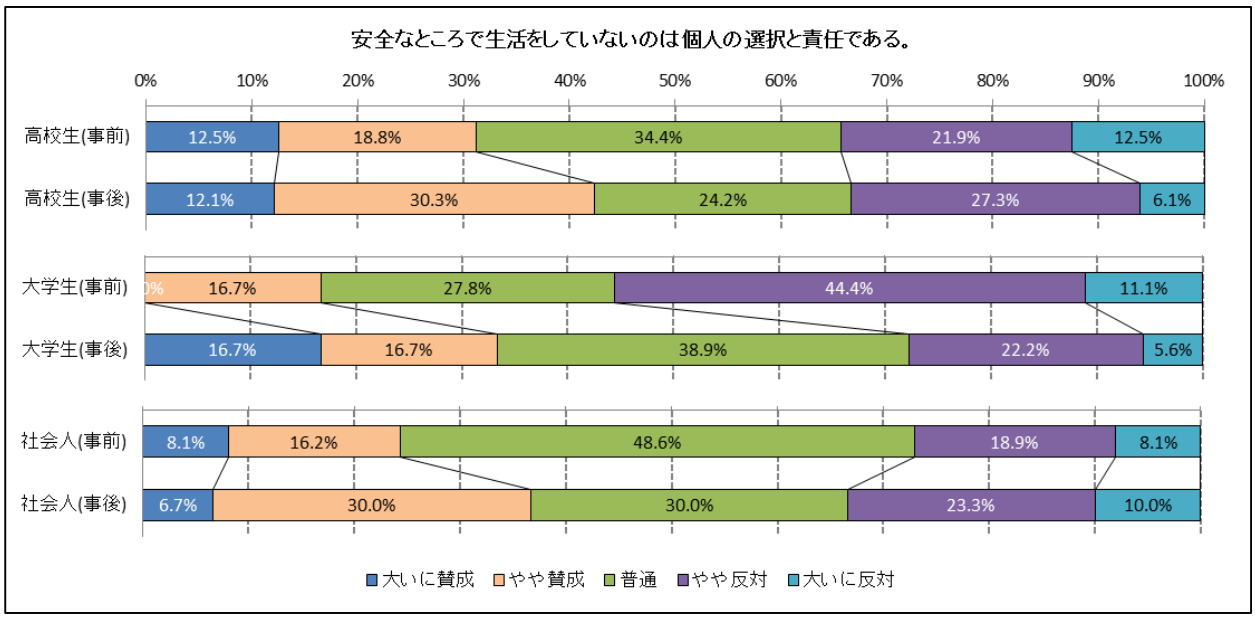

図 6-3-15　安全なところで生活をしていないのは個人の選択と責任である

高校生では肯定派は 31.3%から 42.4%へと約 11 ポイント増加している【図 6-3-15】。一方、大学生は 16.7%から 33.3%へと約 17 ポイント増加している。社会人は 24.3%から 36.7%へと約 12 ポイント増加している。大学生が事後において、否定派が 30 ポイント近く減少しているのにくらべ、高校生では否定派にあまり変化は見られない。

事前に課された課題では、「個人、一人ひとりがしていくべきだと思います。人に言われてからだと遅いし、いざという時、他人に構っているひまはないと思うからです。助け合いも必要なことだと思いますが、一人ひとりの意識の持ち方で変わっていくと考えます。結局、自分の身は自分で守るということだと思います（高校生 H さん）」という意見が出されている。

⑦「災害に備え、助けを必要とする人の情報を日常的に収集し、住民が共有することは必要である」

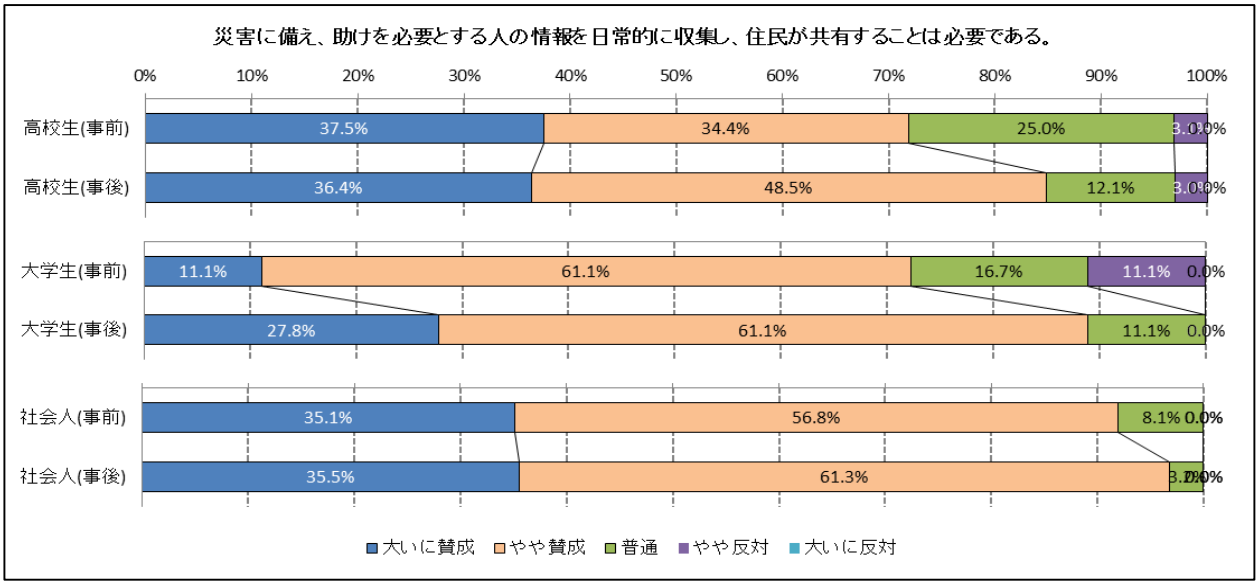

図 6-3-16　災害に備え、助けを必要とする人の情報を日常的に収集し、住民が共有することは必要である

高校生では「大いに賛成」と「やや賛成」を合わせると、事前の 71.9%から事後の 84.8%とに変化しているが、ほとんどの者が「災害に備えて助けを必要とする人について把握しておくこと」が必要であると考えている【図 6-3-16】。大学生についても、72.2%から 88.9%と変化は同様である。社会人については 91.9%から 96.8%へと 100%に近づいており、どの年齢層においても、議論を通して、地域で助けるべき人の情報を共有する重要性について、認識が高まっている。

事前課題でも「体の動きにくい高齢者もいる、よく動く若者が少ないという状況で防災を進めていくためには地域のコミュニケーションをとる情報交換が大切だと思います（高校生 K さん）」との意見が出されている。

⑧「防災や減災の整備などで一部の地域が消滅したり犠牲になることはやむをえない」

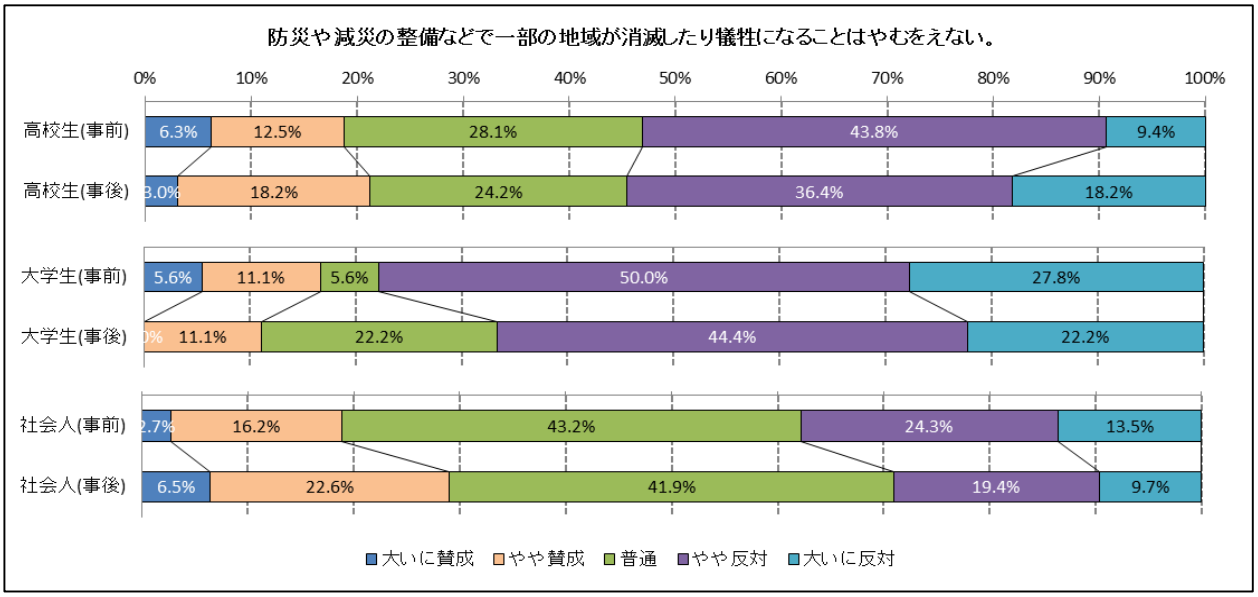

図 6-3-17　防災や減災の整備などで一部の地域が消滅したり犠牲になることはやむをえない

高校生で肯定派は事前では少なく 18.8%にとどまっており、事後でも 21.2%である【図 6-3-17】。大学生は、逆に 16.7%から 11.1%へとわずかに減少している。高校生と大学生では、防災や減災整備にあたり、一部の地域が犠牲になることについて、事前と事後で大きな変化は見られない。事前に出された課題においては、「人口の減少はどうすることもできないかもしれないが、県や市の金銭面の問題なら、もっとたくさんの防災訓練をするなどをして対応できると思う。現に防災訓練などは少ないと思う（高校生 K さん)」のように、地域整備だけでなく人のネットワークや防災訓練による減災も考えられるとの指摘もある。一方、社会人では、肯定派が 18.9%から 29.0%へと 10 ポイント近く増加し、否定派が 37.8%から 29.0%へと減少している。地域の実状や地域運営の現実をよく知る社会人だからこその意識の変化であると予想される。熟慮により、肯定派が増加した変化は興味深い。

⑨「防災や減災は主に消防署、自治体、国の仕事であり、住民の果たす役割は限定されている」

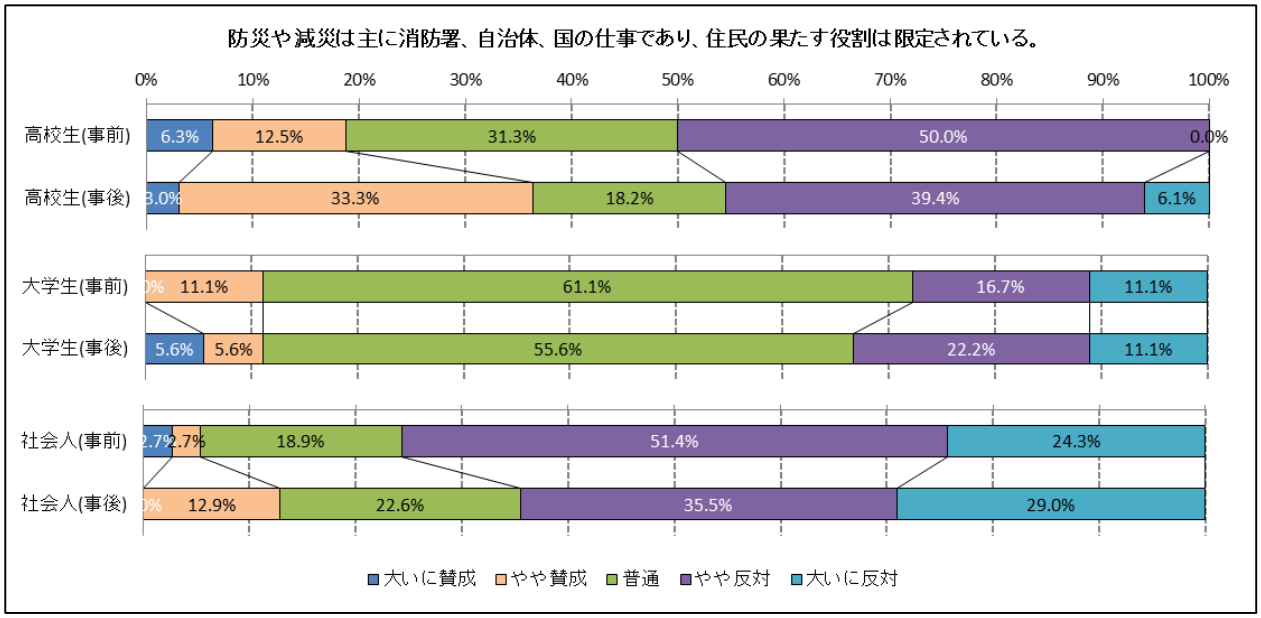

図 6-3-18　防災や減災は主に消防署、自治体、国の仕事であり、住民の果たす役割は限定されている

高校生では肯定派 18.8%から 36.4%へと大幅に増加しているが、否定派は 50.0%から 45.5%へと変化率は低いものの高い数値にとどまっている【図 6-3-18】。大学生では、肯定派は 11.1%のまま変化なく、否定派でも 27.8%から 33.3%へとあまり変化はみられない。社会人では、否定派が 75.7%から 64.5%へと約 11 ポイント減少している。高校生は住民が積極的に役割を果たすことを期待している様子がうかがわれる。一方、大人は議論の内容を受けて、防災や減災に果たす住民の役割には限界があるといった側面にも目を向けるべきではないかといった気づきがうかがわれる。

高校生の事前課題の記述では、「自分は災害などが起こるときは、行政の判断が出てから行動に移る、自分の判断だけで動くのは危険だと思い込んでいたけれど、近年想定外の大規模な災害が起こるといったケースでは行政の判断がそれで正しいのか、遅かったのではないかと思われる場合が多く、“行政の判断は正しい”と信じてしまうのは危険だと思うようになりました。私の考えは、行政、企業、自分のどれ

かの判断だけに頼らず、もしも行政や企業の判断が間違った場合、自分はどのように行動するのが安全なのかを、個人個人で考えるべきだと思います（高校生 M さん）」といった意見が寄せられている。実際に災害が起こった際の自分の判断も重要であるとの認識が見られる。また、高校生の二人にひとりは、防災や減災には住民自身による日頃よりの備えや構えが大切と考えている。

⑩「大学は地域の安全や安心に対して大きな役割を果たすことができる」

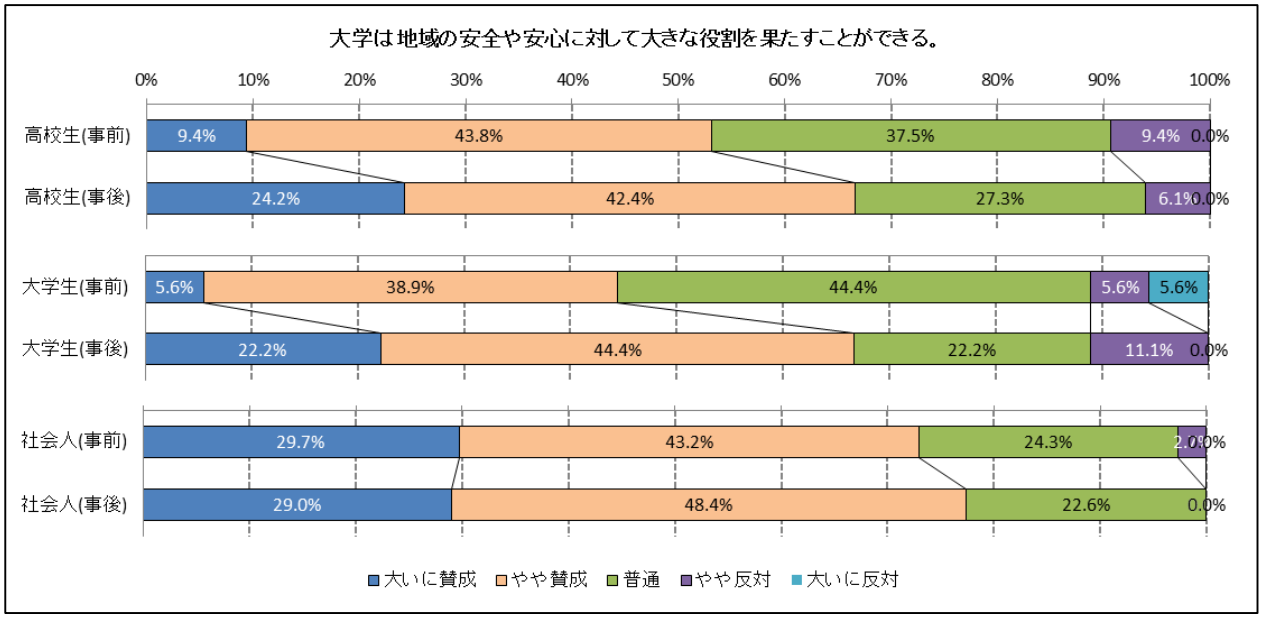

図 6-3-19　大学は地域の安全や安心に対して大きな役割を果たすことができる

高校生では肯定派 53.1%から 66.7%へと増加している一方、否定派は事前事後とも 10%に達していない【図 6-3-19】。大学生もまた、肯定派は 44.4%から 66.7%へと大幅に増加している。一方、社会人では 73.0%から 77.4%へと変化率は低いものの、数値は高い。いずれの年齢層においても、熟議を通して、大学が地域の安全や安心に対して果たす役割についての認識を強めたことがうかがわれる。

今回の熟議では、地域の課題について、①テーマの設定、②ネット上での意見公開、③課題提出、といった事前熟慮ができる体制を整えた。これは、100 人を超える規模の人々が一斉に集い、数日間話し合うという本来の「熟議デモクラシー(Deliberative Democracy)」の手法の代替方法として、兵庫大学が試行錯誤しながら独自の方法として開発しているところである。熟慮段階を研究者（専門家）集団による知の拠点である大学が媒介して行い、大学という場で、半日をかけて行う熟議について評価されていることが数値に表れていると言えよう。

4. まとめ

「熟議」を通して、高校生と大学生は何を経験したのか。本章では、二つの側面から見てきた。一つは、(1)熟議をひとつの体験的教育プログラムととらえ、熟議を経験する前と後ではどのように自己認識が変化したのかであり、もう一つは、(2)熟議という「協働を目指した対話」という課題解決手法を通して、地域における「防災」と「防犯」に対するとらえ方や考え方がどう変わったのかである。

(1) 体験的教育プログラムとしての熟議

兵庫大学の学生の自己認識シートにおける能力評価では、「規律性」が最も伸びていた。自己認識シートにおける「規律性」とは、「社会のルールや人との約束を守る力」である。大学生、高校生ともに、事前で規律性が高いが、大学生では変化率でも最も高くなっている点が注目される。熟議は、人を傷つけないルールに則り、共感を生み出しながら、参加者のさまざまな立場や果たすべき役割への理解を深め、課題に立ち向かい、それを乗り越える手法である。大学生が熟議の手法に則って、大人である一般参加者と共に意見を出し、それらを組み立てながら議論できたことがこの結果に影響を与えていると考えられる。

一方、「人との関わりを踏まえ、働きかけて相互理解へ導く力」である「交渉力」や「相手と意思疎通を図る力」である「会話力」について、自己評価の変化は大学生、高校生で共通して低い。理由はいくつか考えられる。ひとつは、若い世代の参加者にとって、年配者とのやりとりでは積極的に発言することができなかった可能性がある。これについては、事後の自由記述からも読み取ることができる。また、熟議の趣旨として、相手を説得したり、歩み寄るというよりは意見を出し合い、まとめることに主眼がおかれていたこと、自己認識シートで定義する「交渉力」や「会話力」は専任の「ファシリテーター」に任せるというスタンスがあったかもしれない。

次に、ワークショップ参加学生のみで見ると、「現状を把握し、解決に向けて筋道を立てる力」である「計画力」が最も伸びており、手順を踏みながらひとつの方向に議論をまとめていく手法を経験した充実感がここに反映していると考えられる。一方、最も低い伸びとなっているのは、「目標に向かって行動する力」＝「実行力」である。ついで「相手と意思疎通を図る力」＝「会話力」となっている。これらの 2 項目は、事前の時点で比較的高い数値となっていること、すなわち今回の熟議に参加を希望した学生がもともと身につけていた能力であったことから、熟議の影響は他の能力項目に比べ相対的に低くなったのではないか。

高校生のワークショップ参加者では、「思考力」が最も伸びた。「思考力」とは、「問題の要点を把握して、根拠をもとに論理的に考える力」を指している。事前課題を含めて、長期間にわたり一定のテーマについて考え、かつ異なる意見をもつ人々の前で発表する経験が高校生にとって大きく影響があったことが分かる。一方、WS 学生の「運営力」（「違う立場の人々の集まるチームを適切に運営する

力」）が高い評価となったのに対し、高校生では変化がほとんど見られないことから、テーブル全体の運営面にまでは関わることができなかった様子がうかがわれる。

最後に、ファシリテーター役の学生たちについてみると、事前のトレーニングを積んだとはいえ、困難を感じた者が多かったようだ。一般の社会人と高校生、大学生が混在するテーブルで、さまざまな角度から出される意見を整理し、場をコントロールすることができにくかった様子がうかがえる。また、意見を出してもらう大変さ、それらをカテゴリーによってまとめ直す力量の不足、発言を切り上げる難しさ等を感じている。

今後、ファシリテーター養成の事前講座では、ファシリテーターとして「口を出さない」ことに徹することが、場の雰囲気作りのためのコミュニケーション量を減らすことにつながりかねない点について留意していく必要がある。また、学生が、このようなワークショップや課外学習等に参加しやすくするため、授業に組み込む、単位化するなど多様な形態が検討されることが望ましい。

（2）地域の課題解決手法としての熟議

ワークショップ参加学生(WS 学生)もファシリテーター（F 学生）も、熟議に参加することへの期待は「普段、接することのない地域の方々と知り合い話し合うことができた」ことが最も高い数値となっている。このような「場」自体がなかなか得にくいものであり、貴重な体験となっていることがわかる。今後も、地域の問題・課題の共有や市民性を育むためにも、熟議のような機会が増えることが期待される。また、学生同士のネットワークづくりや専門分野が異なる学生同士の交流を通して、多面的に問題を捉える力を育てるイベントとしての熟議の効果についても注目していく必要があるであろう。

一方、討議した内容そのものは参加者にどう捉えられているのだろうか。全体として、ワークショップで出た結論に「納得できている」ようである。このことは、まずその議論のプロセス自体が満足できるものであり、課題抽出や課題への解決案提示までの導入がうまく行ったことの証でもある。一方、熟議のなかで果たした役割によって、代表者討論会のとらえ方が異なっていることは興味深い。WS 学生は「意見が集約された」と感じているのに対して、F 学生は「ある程度分散した意見が出たが、特に鋭く対立するグループ意見はない」と解釈している。

全体として、今回の参加者の約 80%が今後の熟議への参加に前向きであり、熟議参加への充実感が感じられる結果となっている。このことから、ひとつの結論を出すということよりも、納得の行く手順による話し合いにより課題を共有し､解決にむけて協働するということの意義を感じていることがわかる。

（3）高校生は「地域」についてどう考えているか　～熟議前と熟議後～

参加した高校生は「他の人に勧められて参加したが、熟議の進め方を理解して参加し、他の人の意見を聞き、多様な考えや意見をどのようにまとめていくのか」に関心がある。しかしながら、年上の学生や年配の人々の意見から受ける影響について心配している様子もうかがわれる。今後、高校生が年上の人々に遠慮せずに意見を言えるための事前研修や運営上の工夫が必要であろう。

事前アンケートを見ると、大学生や大人と同様、「防災意識が不十分であり、地域での住民の結びつきが弱い」と捉えている。それでは、今回のテーマの一つである地域の防災と防犯について高校生の意見は事前と事後でどのように変化したのであろうか。上で見たアンケートの 10 項目＜p107-114＞の分析をまとめると、以下の通りである。

① 「地域の安全を守るために、プライバシーが侵害されることがあっても仕方がない」

→賛成でも反対でもない「普通」が約 15 ポイント増加していることから、「プライバシー重視の考えが絶対である」とは言えないといった、考え方の揺らぎがうかがえる。

②「防犯のため、住民同士が互いをよく知り、互いに見守るような地域コミュニティを作る」

→「大いに賛成」が 54.5%へと大幅に増加しており、住民が互いに知り合うコミュニティが期待されている。

③「防犯は主に警察、自治体の仕事であり、住民の果たす役割は限定されている」

→議論を経て、防犯をめぐる考え方が深まり意見が二極化した。

④「貧困の撲滅や個人の悩みの解消を助けることで、犯罪の無い社会を創ることができる」

→肯定派は 30 ポイント以上増加し 54.5%が犯罪のない社会を創るためには「貧困の撲滅や個人の悩みの解消」が必要としている。

⑤「防犯のため、犯罪予備軍とされる者や仮釈放や執行猶予中の者の個人情報を積極的に地域に開示する」

→肯定派が約 15 ポイント増加し、33.3%が個人情報の開示に賛成しているが、否定派にはあまり変化がみられない。

⑥「安全なところで生活をしていないのは個人の選択と責任である」

→肯定派が約 11 ポイント増加し、約 42.4%が個人の選択と責任の重要性を実感している。

⑦「災害に備え、助けを必要とする人の情報を日常的に収集し、住民が共有することは必要である」

→肯定派は事前の 71.9%から事後の 84.8%へと変化し、助けを必要とする人に関する情報共有の重要性が強まっている。

⑧「防災や減災の整備などで一部の地域が消滅したり犠牲になることはやむをえない」

→防災や減災整備にあたり、一部の地域が犠牲になることについて、肯定する比率は 21.2%にとどまっている。

⑨「防災や減災は主に消防署、自治体、国の仕事であり、住民の果たす役割は限定されている」

肯定派が 18.8%から 36.4%へと大幅に増加している一方、否定派は 50.0%から 45.5%へと変化率は低いものの高い数値にとどまっており、事前から事後にかけて二極化する傾向が見られる。

⑩「大学は地域の安全や安心に対して大きな役割を果たすことができる」

→肯定派が 53.1%から 66.7%へと増加している一方、否定派は事前事後とも 10%に達していないことから、熟議を通して大学の役割への期待が高まったことがわかる。

（吉原　惠子）